

審査の結果の要旨

論文提出者氏名 カシャーミ、ジョージ アッサード

“シュニヤタ”というのはサンスクリット語で“空”を意味する言葉である。空 (emptiness) という概念は、全てのを肯定した場合に行き着く先で、逆に無 (nothingness) は全てを否定した時に至る何もない状況である。両者は共に一元の世界における究極の姿を表現しているが、無からは何も生まれることはないが、全てを肯定した空からはさまざまな哲学的な思考が展開され、それらの一部は空間概念となり、建築空間に反映されている。“空”概念は仏教と共にインドに始まり、中国、朝鮮を経て日本に伝えられ、禅の奥義として深化しているが、その影響は今日まで続いている。現代の日本の建築家にも、意識的であるにせよ、無意識的であるにせよ、その思想は受け継がれていて、多くの作品に“空”概念が看取される。本論文は、建築空間における“空”概念に着目し、その歴史的な展開や建築との関係に言及した後に、“空”概念の体験実験を通して、その真相を考察したものである。

論文は5章からなる。

第1章は序章で、研究の目的、究明すべき課題、分析の方法等について、全般的な解説がなされている。

第2章は哲学的な思弁に関する解説で、この論文のキーワードである“空”概念について、宗教的、哲学的な視点から、その歴史的な発展形態や文化的な背景についてふれている。西田幾多郎や鈴木大拙、中村元等の日本の哲学者の言説や、哲学書の記述、あるいは、絵画や図象等を援用して“空”概念に対する理解を深めている。加えて、筆者自身の寺院巡りや、禅僧との対話、座禅の体験等を通して得た結論として、瞑想の実体験こそが“空”概念を理解するのに最も適したものであると述べている。

第3章は“空”概念と建築に関する考察である。瞑想は“空”概念を直感的に体得する最良の方法であるが、そのための場所について、初期の石窟寺院から、禅堂に至るまでその設えを調べて空間的な特質を明らかにしている。また、現代建築に現れた“空”概念を参照しながら、次章で行う“空”体験の場はいかなるものであるべきかについて検討している。

第4章は“空”体験の実験である。空間が人にどのような影響を与えるかについて調べるために、平面がスパイラル状で、それに沿う高い壁と狭い階段状の通路があり、中央部がボイドになっている実験構造物を造り、その内部での空間体験について実験を行っている。この構造物に入る前と後とで各自の感覚(空腹、怒り、心配、緊張、悲しみ、寛ぎ、集中、平和、興奮)がどのように変化したか、また、構造物内の各所(7カ所)でどのような感覚(怖れ、息苦しさ、困惑、疲労、怒り、悲しみ、緊張、自然、安全、興味、満足、寛ぎ、楽しみ、興奮、平和)を抱いたか、そしてそれは空間的などの属性(色彩、光線、比例、形態、空虚、その他)に影響されたかを調べたもので、アンケート形式で回答を得ている。この実験のプロセスと結果が詳細に記述されている。

第5章は全体の総括で、前章で行った“空”体験の実験で、体験の前後でどの知覚がどのように変化していったかについて統計的な検定を行っている。その結論として、疲労、怒り、心配、悲しみが減少し、寛ぎ、集中、平和、満足、興奮が増加していることがわかっている。この結果は人と空間の関係性、あるいは主観的な個人と客観的な空間の関係性に有意な相関があることを示している。空間のどの属性がどのように人間の感覚に影響を及ぼしているのかを直接的に対応づけることは難しいが、両者に内的な関係性（interconnectedness）があることは確認されている。

以上要するに、本論文は“空”概念について、その歴史的な変遷をまとめ、それが建築空間にどのように表象されているかについて考察し、最後に、実際に空間体験の実験をして、空間の様相がどのように人々の知覚に影響を与えているかを検証したものである。瞑想のための空間が各地に造られているが、これらは必ずしも宗教的な施設ではなく、瞑想することに意義を見いだす施設になっている。こうした施設が成立することからも解るように、人は瞑想により精神的な安寧を得る。しかし、空間のどの属性が、どのような効果をもたらすかについては、現在のところ全くわかっていない。建築家は単に、効果的とおもわれる演出を空間に施しているにすぎないが、ある空間で共通した体験ができるということは、そこに何らかの因果関係があることを示唆している。本論文は、瞑想に至る空間の諸相を心理的、精神的な観点から分析し、体験実験により実証的に明らかにしようとした試みで、建築空間における空間概念をより鮮明に、かつ、豊饒にするものとして貴重な研究である。これは現実の設計行為にも役立つものであり、建築計画学の基礎的研究として有用で、その意義は大きいものと判断される。

よって、本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。